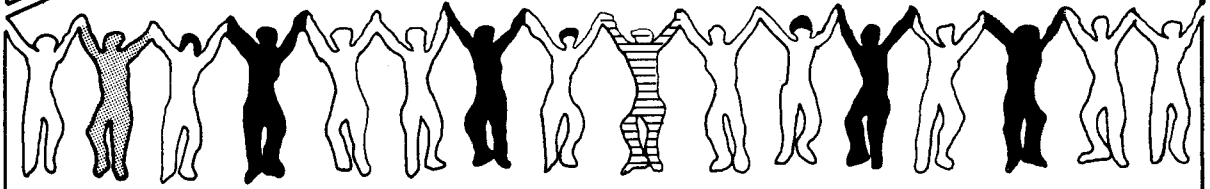


No.5

March 1988

フェミニズム・宗教・平和の会

WOMANSPIRIT



連絡先

関東 〒281 千葉市宮野木町233-53
奥田 暁子 ☎0472(52)1167
郵便振替 東京7 8031

関西 〒612 京都市伏見区桃山町遠山8
源 淳子 ☎075(622)2825
郵便振替 京都6-31178

逐次刊行物

平成元年 3月 25日

国立社会教育会
婦人教育情報センター

目次

女と国家 - 観念による呪縛 -	河野 信子	1
魔女狩り (2)	奥田 暁子	2
海 - 大地 - 宇宙 (二)	鶴岡 瑛	4
「宗教性について」	服部加江子	7
日本のフェミニズムの課題とは?	大越 愛子	8
私の「神谷美恵子と千葉敦子」	中村 苑子	9

女 と 国 家

一観念による呪縛一

A『古事記』(2)

河 野 信 子

老婆 「母親のいざなみのみことは、(中略)につこり笑って身を隠されてしまった」(『泥海古記』)

若い女 「然れどもくみど興して生める子は、水蛭子。この子は葦船に入れて流し去てき。」(『古事記』)(倉野憲司校注本・以下『古事記』からの引用はこの本による)

老婆 『泥海古記』には、『古事記』を下敷きにして創世神話を書こうとするものがあったことが読みとれます。それにしては、そもそもの始まりから、神の人格を変えてしまっ、けろりとしています。

若い女 時は明治14(1881)年、国家の神に

あらざるものを拝むものは、すべて「異端」として、禁圧にかかった政府の眼の前につきつたわけですね。

老婆 この神は「流し去て」たりしない。人の技は、一度目は許されざること。二度目もまた、初期不良とやらにさらされるとした『古事記』の観念は、怖れおののく心性ではありませんが、人は蜂ではありませんでしょう。作ったものは「流し去て」てもよいものかどうか。

若い女 現代の眼をもって見れば、作りそこねたものを「流し去て」ることにこそ、人は罪責を問われるようです。自然としてのガイア(地球)の自浄作用をはみ出して、「地に満ちた」ものは、「何を為すべきか」というわけでございましょう。

老婆 いつも枠におさまり切らぬあなた様には、いま、この世に、人々が寄ってたかって捨て散らしているものが、思弁の裏側にびつりと集まってきているようすな。やがてこの世はすべて三つ巴となりましょう。しかも選べるのは、せいぜ

い右巴か左巴といったところ。三つ巴に捲き込まれればいっそう話もごたついてまいりますので、こしばらくはふたつ巴でいきましょう。まずは『泥海古記』から。

若い女 「この世のはじまりは泥海であった」

(『泥海古記』)。「天地初めて^{ひら}けし時、高天の原に成れる神は、天之御中主神。次に高御産巢日神。次に神産巢日神。この三柱の神は、みな独り神と成りまして、身を隠したまひき」。「高天の原」を天上界とみることに、この国人は、ようやく妥協したとしか、思ひようがありません。あっさりと「身を隠し」ています。「空と海があつた」といいたいにもかかわらず、『古事記』が書かれた頃、外来の強力な思想が、流行ったのではないのでしょうか。たとえば「資本主義」「社会主義」「自由主義」「民主主義」「全体主義」といった言葉が、手あかにまみれても、いまだに健在なように。

老婆 「国稚く浮きし脂の如くして、^{くらげ}海月なす漂へる時」と「泥海」とが、この国人の創生イメージとしては、ぴったりだった、とおっしゃりたいのですね。プレアニズムは原初の混沌を、始源の思想とし、国家持ちは、宇宙モデルを出発点とする。両者は、相互に異和感を持ちながら、二つ巴に囲い込まれねばならなかったと、おっしゃりたいのですね。この部分では、アニズムと道教との習合をたどってみたいくなります。

若い女 このあたりから、女の言葉は、浮遊をはじめるしかなかったようにも思えます。

老婆 杭が懲しいのか、萌えあがるものになりたいのか、浮遊にも変動や硬化が「転生」となって訪れましょう。

魔 女 狩 り (2)

魔 女 裁 判

奥 田 暁 子

1 『魔女の槌』

1486年にケルンで一冊の本が出版された。ドミニコ会に属する2人の異端審問官、ハインリヒ・クラマーとヤーコプ・シュプレンガーによって書かれたこの『魔女の槌』こそは魔女に関する通念を体系化し、魔女裁判のマニュアルとなった画期的な本であった。この本の巻頭には、ローマ法王インノケンティウス8世の教書が掲載されてい

た。

「近ごろ、北ドイツとライン諸地域で、多くの男女がカトリック信仰から逸脱し、男色魔、女色魔に身をまかせ、もろもろの忌まわしい妖術によって田畑の作物や果実を枯らし、胎児や家畜の子を殺し、人畜に苦痛と病気を与え、夫を性的不能にし、妻を不妊にし、多数の人びとの災厄の原因となっている……。われらの愛する息子ら、すなわちドミニコ会士、神学の教授、ハインリヒ・クライマーとヤーコプ・シュプレンガーとは、法王書簡にしたがって同地方の異端審問官として派遣され、その職にある。しかるに同地域の聖職者と官憲とは魔女の罪の重大さを自覚せず、兩人に十分協力しないために、彼らの任務の遂行が阻害されている……。」

教書は2人の審問官にサタンの手下を見つけ出し、処罰する仕事に役立ちそうなものはなんでも提示するよう命じていた。

15世紀の半ばには、『魔女の槌』をはじめとして、魔女を異端者として扱う専門的な魔女論がぞくぞくと現われはじめた。ちょうど印刷術の発明と相まって、これらの魔女論は広範囲に出版され、普及した。たとえば『魔女の槌』は、ドイツでは16回、フランスでは11回、イギリスでは6回、版を重ねた。

すでに述べたように、ヨーロッパの社会には古くから魔女伝説が生きつづけていた。嵐や早ばつは魔女が起すのだと信じられていたし、インポテンツや不妊も魔女の仕業だと考えられていた。ところが、『魔女の槌』などの魔女論は、この伝統的な魔女像に新しい要素をつけ加え、「新しい魔女」を生み出したのである。それは悪魔との結託という概念であった。それまでも、異端審問の中に、時どき魔女行為がまぎれこんではいたが、魔女行為を裁く法的根拠はなかった。ここに初めて、魔女を異端として裁く法的根拠が与えられたのである。

しかも、「他の異端には悪魔との結託ということはない。魔女の忌まわしさは、この悪魔と人間との汚らしい関係にある」として、新しい魔女には「極裏の異端者」のレッテルが貼られることになった。

ところで、サタンとの結託はどのような行為をさすのだろうか。1582年(魔女裁判の最盛期)にフランスの異端審問官が下した判決の中に、魔女の行為の数々が羅列されている。それによると、

キリスト教洗礼の拒否、悪魔に忠誠を誓った、魔女集会でサタンを神として讃えた、魔術と呪文で人畜に危害を加え、多くの新生児を殺害した、墓地から自分の殺した子の死骸を掘り出し、忌まわしくもそれを食べた、色魔と性交した……などである。

病気はほとんどが魔女によるものとされたが、とくに性に関するもの（性交不能、男根脱落、流産、不妊など）が多かった。ともかく、上記のどの行為にしても、具体的な証拠とは結びつかず、犯人を特定することなど不可能に思われるが、魔女裁判はこのような行為をした者をすべて有罪としたのである。

2 魔女裁判

魔女裁判の特徴は、その秘密性と陰惨さにあった。被告は自分を告発したのが誰なのかを知ることとはできず（密告は大いに奨励され、幼い子どもが母親を密告した例も多数あった）、同罪者の容疑を受ける危険があったので、証人や弁護人になろうという者はほとんどなかった。被告を有罪とするもっとも有力な根拠は、本人の自白であったが、誰もが上記のような行為は身に覚えのないことであり、当然、自白する者はいなかった。そこで、異端審問で効果を上げた拷問が、魔女裁判でも活用された。

拷問は残酷をきわめた。第一段階では、被告を裸にし、鞭打ち、指締め、梯子（梯子型の台に被告を寝かせ、ロープと万力で四肢を四方に引張る）などが行われ、それでも自白しないと、本格的な拷問に移る。吊り上げ、吊り落とし、骨砕きの拷問でも自白が得られない場合は、さらに、手または足の切断、焼きゴテ、鉄の靴（熱した鉄の長靴をはかせる）のような恐ろしい方法が用いられた。

魔女裁判における拷問がとくに残酷であったのは、魔女が「格別に凶悪な異端者」（『魔女の槌』）であり、悪魔がいつ救援にやって来るかわからないからであった。ほとんどの「魔女」はこの拷問に耐えられずに、ありもしないことを「自白」した。

「この脚を見てください。まるで火のようです。燃えあがりそうです。ハエが一匹とまるだけでもたまりません。もう一度拷問なんてとても……。二度とこんな苦しみをやるより死んだ方がましです。」

「拷問のために、自分がこんな偽証をすること

になろうとは、われながら、夢にも思いませんでした。」

これらの言葉は、死刑囚のさんげ僧をつとめていた牧師が、処刑前の「魔女」から聞いて書き残した数少ない記録の一部である。拷問がなかったら、おそらく大規模な魔女狩りは起こらなかっただろう。国法によって拷問を禁じていたイングランドでは、他のヨーロッパ諸国ほど大規模な魔女狩りは起こらなかったと言われている。

魔女裁判では、本人に罪の行為を自白させるだけでなく、共犯者を聞き出すことも重要であった。こうして、一人の「魔女」が逮捕されると、その家族や近隣の人びとががつぎつぎに共犯者としてつかまり、村の人口が半減するところもあった。ある地方裁判所では、37年間に300人の魔女が6,000人の共犯者を自白した。なかには、一人で、100人以上の共犯者の名前をあげた被告もいた。

自白をした魔女に対する判決は死刑一本に決まっていた。死刑は、生きながらの火刑と絞殺した上でその死体を焼く火刑の2種があったが、イングランドを例外として、他はすべて前者であった。こうして30万人とも300万人ともいわれる魔女が焼き殺されたのである。

最後に、処刑された魔女の遺産はすべて没収された。魔女裁判は、裁判に要したすべての費用（逮捕、尋問、拷問の手数料、獄内の食費、自分の首を締めた縄代、火刑用の薪代、油代、役人の手当や旅費など）を魔女の自弁と規定していた。没収財産はその費用に充てられたのである。

以上が魔女裁判のあらましである。それでは、どのような人が「魔女」とされたのだろうか。

3 だれが魔女だったのか

前号で述べたように、魔女の疑いをかけられたのは、圧倒的に女性であった。ノーマン・コーンは魔女の役割を押しつけられたのは50～70歳の老女、一人ぐらしの女性、赤眼や斜視など奇形のある人、風変わりで気難しい人などだったと言っているが、貧しい老婆というのは魔女狩りのごく初期の現象であったようだ。逮捕者が増え、魔女狩りがエスカレートしてくると、年齢や社会階層には関係なく、あらゆる女性が対象となった。

たとえば、ドイツのビュルツブルグでは、1627年から1629年までの3年間に、29回の火刑が行われた。第1回目は「太った行商女」他3名の女性であったが、3回目には金銀細工師の妻、4回

目には市長夫人が処刑者の中に含まれており、13回目からは子ども（9歳あるいは10歳の少女とその妹）、20回目にはビュルツブルグーの美少女ゲベル・バベリンが犠牲者の中に数えられていた、という。

また、新大陸アメリカに飛び火した魔女狩り（1692年、マサチューセッツ州セーレム村で起こった）でも、最初は年をとった黒人の女奴隷と村でさげすまれていた2人の女が告発されたが、1週間もたたないうちに、村でも信心深く、高潔だとされていた女性、マルザ・ユリーが「魔女」だとされた。その後は、サラ・グッドとその5歳になる娘、レベッカ・ナースとその2人の姉妹がつづいた。レベッカ・ナースは大勢の家族から愛されていた立派な母親で、信仰心の篤いキリスト教徒であった。

魔女の中に子ども、とくに女の子が多数含まれていたのは、悪魔の血が娘に遺伝すると考えられていたためである。

また、産婆や民間の治療師が魔女とされる例も多かった。産婆は、生まれたばかりの子どもに悪魔の洗礼を施すから、というのがその理由であったが、真相は、資格のない彼女たちの方が専門家の医師よりも治療に成功することが多く、医師にとっては脅威的な存在だった、ということらしい。

したがって、メアリー・デリーが言うように、魔女とされたのは、経済的にも、精神的にも、また、モラルの点でも自立し、地域社会の中ではひととき目立つ女性であったということだろう。

魔女狩りがなぜ起こったのか、また、なぜ女性がいけにえとなったのかについては、さまざまな見解がある。今回は、女性との問題を中心に考えてみよう。

追記：前回の記述の中で「ヴァルド派も全滅させられた」としてしたが、田川建三氏からそれは間違いで、「その後イタリア北部とフランス東南部に生き続けており、今日でもワルド派の神学校は存在する」というご指摘がありました。また、アルビ派についても、今日では「カタリ派」と呼ぶのが正しいとのことでした。

海 — 大地 — 宇宙 (二)

— 身の現実から「存在」の尊さへ —

鶴岡 瑛

先日東京の会の勉強会で「しんらんの女性観」という題でお話させて頂き、宗教とフェミニズムの取り組みの、ほんの序論ながらこれまでモヤモヤしていたものの整理ができ、今後の方向付けができたような気がしています。その時出てきた問題点をもう少しここで検討してみたいと思います。

しんらんの思想を考える場合「身」を抜きにしては考えられません。身とは女（男）としての限定された体（感覚器官とそれに伴う意識の働く場）と同じく限定された環境（関係性と言い替えてもよい）を持つものだということをまず押さえておき、そして体（先天的な相違）に加えて環境の違い（後天的）も重なりますから女（男）に生まれついたものには〈制約と可能性〉の両面において生き方に違いが生じてこざるを得ないということを、確認しておきたいと思います。

また仏教の立場からすれば「無我」の思想が基本ですから、この女（男）の「生き方」というもの、女（男）はかくあるべしという固定的なものでないことはいまでもありません。むしろキリスト教でいうような霊性—仏教で、ことに真宗で靈魂ということは問題がありますので、「本来の自己」としての「普遍の人間性」とでもいっておきますが—が本質であって女（男）の区別は二義的なものであると思われるのです。しかし本質でないから身はどうでもよいものかということ、求道の過程においてはこの身の特殊ほど大切なものはないと、この身の特殊を軽視するところに他の特殊—個性—人格を尊重する視点は育たないはずで、「本質—性（しょう）」は外に現れる「相—現象」を通してのみ私達に知覚されるものです。自他の現実をおろそかにして観念として「人間」を語ることは固く自戒しなければならないことでしょう。〈女ということにこだわらず人間の差別として考えてゆく〉というゆき方に対し、あえて女にこだわってゆきたい、それが私の求道の過程であると思っています。

ところで私は「しんらんの女性観」の中で仏教における女性差別の根本を、1. 求道における女性修業者の弱さ、不徹底さが嫌われる。2. 仏教教団においては男性修業者が中心であるので、男性に

としては異性である女性の存在が修業の妨げとなるとして、誘惑者、魔とみなされてきたことを見ました。釈尊在世当時、あるいは初期の原始仏教の時代をみても、經典などに後の部派（小乗）仏教時代ほどには極端な女性蔑視の言葉は出ておりませんし、女性求道者は男性に比べて多くの戒律を課せられたとはいえ女性も教団を持つことを許され、悟りを得て喜ぶ女性の声も「テリーガーター（長老尼の詩）」などから窺えるのです。このことから教団の主宰者としての釈尊は女性の求道の困難さは十分認めながらも女性の修道一成仏は否定されていなかったと思われます。以上からも本来仏教には女性を差別する根拠はないものと断定したいと思います。

ではなぜ部派仏教時代においてあれほど極端な女性差別の言葉が經典に現れるかといえば、それは世俗の女性蔑視を仏教界が積極的に取り込んだ結果と思われます。そこに女性を差別しようとの意志があったというより、「存在」と「生き方」の混同と、男性の、このような社会、歴史を作り上げてきたものとしての自身の責任（共なる業）についての無自覚があったのではないと思われるのです。さらには当時の仏教が複雑精緻な学問になりながら、それを学ぶものが仏教の根本精神である大慈悲（他の痛みを洞察する智慧、共に悲しむ愛）をおろそかにし、差別される者の痛みを思うことなく、男性＝人間の高みから他者としての女性を裁いたからではないかと思われるのです。

仏教であれキリスト教であれ、宗教が女性の身（性）を卑しめるということは、そこに「身－存在」と有り方（生き方）の混同があるからと思われます。女（男）の身－存在そのものには尊いも卑しいもない。存在は価値判断に先んじて「在る」ものです。その女の身をもっていかに生きるかが問題にされなければならないのに、女であることがすでに罪深いことであるような扱いを長いこと女性は受けてきたといえます。女も男も共に固有の生理をもって人類の一員として生きているものです。いかなる宗教といえども人類の生存を否定するのではないかぎり女（男）の存在－身そのものを悪とすることはできないでしょう。「存在そのもの」と「生き方」は峻別されねばなりません。「人間」とは女（男）であることを否定するところに成り立つものではなく、固有の身をよりよく生きる（超える）時に成就されるものであらうと思われます。そのことに立ってのみ男女の身をも

って生きるものが優劣、貴賤、上下の価値を競うことなく、共に生きるものとしての同一の基盤に立てるでしょう。

この「存在」ということについてですが、先日の会合で「仏教では人権ということをどう見ているか」と聞かれて、ふいのことだったので不得要領な答えに終わってしまって、自分でも少し詰めてみないといけないな、と気になっていたのがこの「存在」ということに連がってきたようですので付け加えさせていただきます。

仏教では「人権」ということはあまり言いません。仏教では人間の形に生まれついているから人間だ、というより私達は「人間としての成就－完成」への過程にあるものと認識します。私達の「生き方－有り方」次第で、形は人間ながらいつでも修羅、餓鬼、畜生的な有り方に転落しかねないものです。またこれは仏教独自の見方ではありませんが、人は人として生まれてきたからといって「平等に人としての権利を持つ」というのはこの現実においては夢物語にすぎません。たとえば、基本的人権が保証されるのは、人がある国の主権の保護の下にある場合に限られる、という限定があります。無国籍あるいは国籍があっても、その保護を受けられない状況に置かれたら、人権もへったくれもない、ということは現代世界の冷厳な現実です。また同じく国家の主権の下に保護されるにしても、どこにどのように生まれたかによって、人権の実質は大きく変わってくるでしょう。

たとえば核を例にとって考えると、核兵器が戦争の抑止力になりうるとして核軍備を推進する国の政策に対して、私達、その核の傘の下を選択した国の国民としては、たとえその惨禍を受ける立場であっても、及ぼし得る力は無に等しいのです。人権は人間の生得の権利といっても本当に平等ということはなかなか有り得ないことのようにです。

〔強い主権の下にぬくぬくと人権を享受している私達日本人、かつてアジアの国々の主権と人権を侵害し、そこから台湾の元日本兵問題、在日及びソ連領残留の韓国、朝鮮人問題、中国残留日本人の帰国問題等の後遺症を引きずりながら、なお集団内での閉ざされた「感覚的思考」の体質を持ち「個の自立－自律」に疎い私達としては、そこから疎外されてゆく人々の痛みの声から学ぶしかないようです。〕 また「人権」という本来人間の平等を保証するはずのものが、新たな差別を産み出すものともなるという、この冷厳な事実を臆する

ことなく見つめてゆく「目－正見」を喪ってはならないでしょう。

仏教においては「あらゆる人間はあるがままで他と掛け替えのない尊い意義を持つ」ということが「人権」に代わる基本的認識といえます。人間に限らずあらゆる生き物の命の尊厳、ということもできます。その根本にあるのは、自他に分断されたこの私達の命も、元は一つの大きな根源の生命から出ているという認識ではないでしょうか。

この「あるがまま」ということは真宗ではあいまいな、むしろ誤解をされている言葉と思いますが、「このままでいいのだ」ということではなしに、「自他の比較評価、価値判断を超えた存在そのもの」ということだと思います。優劣とか、善悪、美醜、好悪の感覚的判断。社会にとって有用か無用かというような評価を超えて「あらゆる存在が個有の意義を持って生まれついたものである」ということでしょう。〔この意義とは「人はみなこの人生に仏道を成就し、人間として完成すべく生まれついている存在だ、それが人間として生まれたことの目的－使命である」という仏教的な認識が前提にあります。ただしこれは仏教でなければ人間の成達はできないというのでなく、仏教的観点から見ればこうなる、ということです。〕

私達の一人々々がこの「存在するあらゆるものが…」という認識－真理に則って生きられないということが、人が人を差別するということの根本にあります。私達は価値判断－分別意識という色メガネを通さずに、存在をありのままに見ることはできないものなのです。それが仏教から見た差別の根本です。人間が言語を持ち他と何らかの関係－社会性をもって生きるところに必ずこの価値判断、価値基準の共有ということがあります。教育も伝統も文化というものも、この意味では差別の上に成り立っているといえなくもありません。他人や事物を自分にとって無害か有害か、有用か無用か、好ましいか嫌うべきかの判断、選択をしないでは生きていけないこの世にあって、私達は日々無数に、ある面では他人を差別し、別の局面では差別されつつ生きています。女性が差別される一面を持つのも事実なら、別の価値基準に則って女性もまた男性を差別して生きているのです。

差別とはそのようなものであり、あらゆる差別を根絶することは無論、自分が行っている一々の差別を自覚することも私達には不可能であることをまず認識しなければなりません。だからこそ差

別されている人の訴えから学ぶことが必要になるのでしょうか。ところが私の周囲では、自分は差別されている個々の人の声を聞くまでもなく差別を理解していると、差別される人はあんなにワアワア言いたてないで我々の善意を信じてくれてもいいではないか。あんなふうでは一緒にやっつけていけない、というような意見さえ聞かれるのです。

〔自身差別されるものである私が差別について言い得るのは、差別される者が求めているのは同情ではなく理解であると、この差別の構造を正しく見、差別している者が自らの差別心に目覚めよということです。差別を受けている者にはまたそのことにおいて差別というものをはっきりさせる責任があります。差別されていることを語るのは恥ずかしく勇気があることです。でも一つ々々の事実を語ってゆかねばならないと思われるのです〕

これが宗教の、少なくとも仏教の差別を見る視点であると思います。だから仏教の差別に対する取り組みは深いのです。仏教は人権を否定するものではありません。女性差別に対しても他の分野の取り組みを否定するのではなく、それらの視点を包摂しなお深く差別の根本に迫る視点を有していると私は信じています。なぜなら世俗の学問－科学、医学等では人間の現象についての精密な取り組みはできても「人間とは何か」「人間の生まれた意義－目的は何か」に迫れるのは宗教と哲学だけだからです。また私に宗教と哲学の違いを論ずる資格などあるはずはありませんが、一つだけ違いを上げれば哲学は自分の依って立つ立場を決定しなくても客観的に学べるのに対し、宗教－信は自己の依って立つ場が決まらなければ成り立たないということです。この「帰依－依って立つ場の決定」が、宗教の宗教たるゆえんと思われます。この決定をせず心情的に酔う者に対しては、信の主体は決してその働きを顕らわにすることはないでしょう。

この「決定」がなされる時には同時に「自己（人間）とは何か」ということが明らかにされる時です。自己が明らかにされるとは、自分を含めて自分を成り立たせている法も明らかになることです。この例として清沢満之が明治三十六年に発表された「絶対他力の大道」の一部を引いてみます。これは観念ではなく自己の体験の表白です。

「自己とは他なし、絶対無限の妙用に乗託して任運に法爾に、この現前の境遇に落在せるもの、すなわちこれなり」

「宗教性について」

服 部 加江子

宗教を嫌うか、無視する人々が多い中で、宗教性を述べることは、少し勇気がいります。宗教という言葉に拘束されないなら、人々は全て、この中で生きていることがわかります。（罪は既成宗教にもあり。）

人間や全てのもの、時空をとりまく「真理」というか、「摂理」のようなものです。こう考えると随分気楽になるし、無限の響きがあります。

私は、最近ミヒャエル・エンデの『オリーブの森で語りあう』（岩波書店）と、子安美知子の『モモを読む』（学陽書房）を読んで、この宗教性がエンデの中で血肉化されているのを驚きをもって眺めました。子どもにエンデの『モモ』や『はてしない物語』を読んで聞かせつつ、私の考えていることと馬が合う（これが難しいノ）と思っていたものですから。

ドイツ（人）と日本（人）という違いはありつつ、今まで私を受けつけてくれる本は余りに少ないと嘆いていたので、じっくり解け合ったことは非常に嬉しいです。仏教の講座を少し受けたりはするのですが、「めざめたる人々」という体験以上に私をひきつけるのは困難なのです。キリスト教の方は、社会的問題意識に長けていると思いつつ、つまるところ「神」が邪魔をします。

そこで、エンデのことですが、彼は、子安さんの説によると、精神の世界を信じ、生まれ変わりを信じているようで、このところは私は余り心をそそられませんが、いろいろ何十年も生きてきて、昔思った程、神を否定したり、現実目に見えることだけを信じるという物質信仰はしなくなりました。

実は、私は科学を信じ、将来もその方向に進みたいと思っていた程ですから、自分でもおかしい程転換したわけで、私は日常を論理の目で隈なく荒らしまわったおかげで、目に見えないつながりをことごとく壊してしまい、人間関係もこわしてしまいました。直観的に見るよりは、分析的に見て、世界から外へ出て眺めてしまうような結果に陥りました。

再び世界のふところに抱^{いだ}かれたいという気持ち^だが最近してきた所（この思いは10年、20年とあり

ました）で、エンデと出会ったのです。人と人とが無意識のうちでつながり、或いは、自然や動・植物との無限（想像以上）のつながりがあるということは、生きる力の源であって、それを自分たちの近視眼的な因果関係や利益のために断ち切ってしまったら、ひどい「しっぺ返し」を受けるという真理があります。

しかしながら、私たちは、人々やまわりの世界に感謝しつつ、やっぱり普段は、自分で成り立っているという行動をしています。

エンデは、社会変革に大いに目を向けていて、本来の人間や自然、社会にしようとする限り、思想と実践は切り離せず、それを意欲的に行っているようです。

核兵器、東西緊張、世界的規模の飢え等々に憂えつつ、小説という創造世界での実践は、現代を生きる人間の問題を包みこむものです。

「女性」の問題にも開かれた目をもっているようです。（男性に余り多くを期待できないというのは消極的な考えかもしれないけれど、この思いをつい私がもってしまうのも事実。）

宗教性という言葉に立ち返って、これは、「真理」という普通の意味があると共に、「自分」（他者が全て見離したとしても）を受け入れてくれるということだと思います。

そして、私の好きな言葉ですが、エンデも使っている「かけがえのない存在」が、自分であり、人間一人ひとりであり、或いは動・植物や自然であります。この言葉は、無限の意味をもつと思います。「主体性」という意味も持つでしょう。変革者でもあり、創造する者でもあり、幸福を望み受け取る者でもありましょう。（エンデは、愛・信・希望の重要性を知っています。）

エンデを参考にしながら私の意見を語りましたが、甚だわかりにくいことでしょう。自分を大きな存在に委ねることができることで、その人は救われていると思います。疑えば凄じい不可知なことがありつつ、漠とした信頼や安心を抱けるところまで下り立つ必要があります。

愛や信、希望は、自分自身が積極的に実践してこそ、その世界を到来させることができるでしょう。

人がどのような行動をとるか（如何に生きるか）は、無限にあります。自分をとりまく世界（自然や社会）を知ると共に、究極の姿（宗教性や生・死、歴史などで表わされる、物以上の世界を知っ

って、変わらないものに気付く。流動的に動きつつ、一瞬々々を生きる)を知って、人々との間にある断絶感を越えることが、世界のふとこころに抱かれる(宗教性のめざすところ)ことだと思えます。

日本のフェミニズムの

課題とは？

大越愛子

八十年代後半フェミニズムの諸理論も出つくした中で、ようやく女の抑圧構造の全体像も見えてきたように思う。ここで今一度整理し直してみると、マルクス主義フェミニズムが明らかにした男＝生産労働、女＝再生産労働(家事労働)の性別役割分業体制、文化フェミニズムが暴いた男性中心の文化パラダイム、ラジカルフェミニズムが告発した女のセクシュアリティの抑圧である。理論レベルでは、労働、文化、性の三次元において女に向けられた構造的暴力の実態が明らかになったといえるが、日常的レベルでは、この三次元がからみあって女の身体、生活、内面性を呪縛しているので問題は複雑である。

日本の状況からみると、性別役割分業解体が労働過多の男性にも比較的受け入れやすく、また優秀なかつ安価な女性労働を欲している日本資本主義の要請に基づくマス・メディアのプロパガンダも盛んなせいか、徐々にではあるが、日本社会にも定着し始めてきた。困難なのは、男性中心の文化パラダイム批判と女のセクシュアリティの抑圧への告発である。欧米のフェミニズムはこの二問題にも積極的に取り組み成果をあげているが、日本のフェミニストは、この内面に根ざす二つのタブーにまだまだ及び腰である。そうはいうものの、セクシュアリティに関しては最近出版物もふえてきたが、それもようやく女の性的要求の市民権獲得といった近代主義的次元にとどまっている。文化パラダイムにいたっては、知の軽薄化の風潮の進む中で、まともな問題提起すら出てこない。

ところで、日本のフェミニズム理論は、江原由美子氏の指摘されている如く性差はあるか、ないか、男なみか、女なみかという非本質的な論争に時を空費してきた。(「痕跡を消す権力」『クリティーク』6号はみごとな論文である)彼女の鋭い批評精神によって、こうした無意味な論争に今

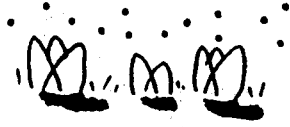
ようやくピリオドが打たれたといってよいだろう。となると、これからが日本のフェミニズムの理論的格闘の時期となる。「いまや総論の時代は終わった。各論の時代である」という声も聞くが、とんでもない。今までは理論的格闘の前座にすぎなかったのだ。というのは、日本のフェミニズムは決定的な文化批判、特に宗教批判をネグレクトしてきたからである。

欧米のフェミニズムのすどみは、その徹底的な一神教との対決に基づいている。彼女たちは近代の女性抑圧体制、つまり前記の性的役割分業、男性中心の文化パラダイム、女のセクシュアリティの抑圧が一神教的世界観、男女観、性イデオロギーに基づくことをラジカルに暴いたのである。その宗教批判の苛烈さは、それをあびて生き残るものがあれば、それこそが真に宗教に値するというまでに徹底している。そうした基本的下地があるからこそ、そこから派生した上記の三次元の問題も、その核心をついて考えぬかれたのである。その点で日本のフェミニズムは基本的土台の批判を行っていないから、上記の三次元への問題も切り口が甘く、腰くだけになってしまうのである。

欧米の一神教的ロゴス＝ファルス中心主義パラダイムからみれば、性別役割分業、男性中心の文化体系、女のセクシュアリティの抑圧は当然の帰結である。とすれば日本の性別役割分業、男性優位文化、女のセクシュアリティの無化は一体いかなるパラダイムから由来するのだろうか。ここを解かなければ、何故性別役割分業解体の建前が日本資本主義にたくみに利用されつくすのか、女らしさ、男らしさの内面規範が若い世代にますます強く再生産されるのか、日本の男と女のセクシュアリティがこれほど貧困なのかが決して解明されないのである。

日本の宗教とは何かというと、仏教以外に神道、儒教などもあげられて、フェミニストの中には専ら儒教批判を行うむきもあるが、(青木やよい氏、宮迫千鶴氏)やはり中心は仏教であろう。仏教の空無のパラダイムとの対決こそが今や必要なのである。絶対的真理の屹立をゆるさず、中道を説き、相互依存縁起説に基づく空思想を展開していく仏教パラダイムのやわらかな土壌から、いかにすさまじい収奪のシステムが、おぞましい女性のセクシュアリティ蔑視が、すべてを受容する諦念が生み出されてきたかを、徹底的に解明しなければならない。その文脈において、先日源淳子氏が某紙

に連載された「真宗における信心の構造」の分析は、日本の女たちがどのような沈黙の文化を強要されていたかを究明した、貴重な第一歩といえるだろう。（四月玄文社刊行の山村嘉己編『性差と文化』《仮題》に含まれる予定）



フェミニズム・宗教・平和の会シンポジウム 「神道の虚像と実像」

日本人の精神に多かれ、少なかれ影響を与えてきた神道を、歴史をさかのぼって、フェミニズムの視点から見直します。

- ・ スピーカー 岡野治子、河野信子他
- ・ 日 時 3月27日(日)午後1時～5時
- ・ 場 所 東京都婦人情報センター
- ・ 連絡先 ☎ (0472) 52-1167 (奥田)
☎ (03) 815-0988 (岩田)

私の「神谷美恵子と 千葉敦子」

フェミニズムの限界と展望 I

中 村 苑 子

この機関誌に岩田さんが神谷美恵子について連載して書いてこられたのを、私はいつも大きな関心と共感をもって読んできた。私自身、学生時代に神谷美恵子を読み、同時代に生きた女性としてかなりの親近感と尊敬の念をもち、詳しいことは忘れてしまっているがかなり多くを彼女から学び得てきたと思う。そんな訳で全く久しぶりに岩田さんの文章を通して神谷さんに再び接し、改めて深い共感をもち得たことは大変嬉しく毎号楽しみにしてきた。岩田さん自身の造詣の深さもさることながら、神谷さんの生き方そのものに御自分の方向性を見出されていることが察せられる。

ただ4号に書かれた千葉敦子とのことに関しては、私はどこか異和感が残ってしまった。この異和感は時が経つにつれ大きくなり、フェミニズムそのものの理解の仕方と方向性の違いと思わざるを得なくなり、書いてみたい。

周知の如く千葉さんは東京新聞で初めての女性の経済担当記者としてスタートし、ハーバードに留学し、その後しばらくして経済・社会・政治問題を専門分野としたフリージャーナリストとして、主に英文で海外の諸紙で活躍し、文字通り自分の力で自分の道を切り開き、エネルギーに生ききった人だ。そのリベラルな視点と広い知性と同時に私的生活をも充分エンジョイした生き方に私は拍手を惜しむ気はない。まさにフェミニズムの

鑑とも言えるべき人だろう。実際乳癌の手術を受け、何年か後再々入院、治療を続けながらも、死と向かい合った自分をも客観的に見つめ、その体験をジャーナリストとしての冷静さを失わずに書き続け、医のあり方、生の受けとめ方を世に問い続けた稀有の人だ。

しかしこれだけ彼女を評価しながらも、私はどこかおかしい、何か足りないという思いがどうしてもしてしまう。そしてこの思いは現在の大きなうねりとなっているフェミニズム運動そのものに対しての共感と同時に、全面的にはコミットできないという思いと重なっている。

例えば先号に出ている「ななめ読み日記」は多くの示唆に富み、いくつもの共感を分かち合ったのも事実だが、始めから最後まで何か異常なものを感じずにはいらなかった。これはミヒャエル・エンデの「モモ」の中に出てくる時間泥棒に対してモモが感じた寒さと同じものではないかと思う。「ななめ読み日記」の中で著者自身が「時間泥棒」とは無関係な生活をしていると書き、更に「むしろこういう時間をとられることがらを意識的に避けてきたわけだが、私はそういうライフスタイルこそが生活の質の問題を決定するのだと考える。つまりムダな時間を使わないこと、やりたくないことはできる限りやらないこと、そして好きなことをする時間をたっぷりもつことが本当のクオリティーライフなのだと思う」(p. 115)と記している。そして事実彼女は一年間に日本語、英語を含む200冊以上の本を読み言及している。しかもそれは自分の仕事の資料となるような書籍は含まれていない。「乳癌なんかに敗けられない」の中にも、彼女が初めて乳癌の疑いを抱き診察を待つ間も、入院中もすさまじく読んでいたことが書かれている。千葉さんはこういう風にして自分のク

オリティーに磨きをかけた人だ。

さて、「モモ」の中に多くの人間がその存在に気付いていない時間貯蓄銀行から来た「時間泥棒」のことがでてくる。これは人々の心の中に入り込んで、その人から時間を奪ってその時間によって生きている。その奪い方は計算によってムダな時間を書き出し（例えば、年寄りのお母さんと話したり、インコの世話をしたり、車椅子の友達を訪ねたりの時間）削って効率よく時間を使うことを勧め、それによって近代的進歩的な人間の仲間に入るのだと説得する。その説得に納得した人は、まさに「時は金なり」で生き始め、「時間をケチケチすることではんとうは全然別のなにかをケチケチしていることには、だれひとり気がついていない」（p. 95）

千葉さんは友人も私生活も大切にしたい人だと思うので、文字通りはこれには当てはまらないと思うけれども、彼女があれ程すばらしい本を読み、すばらしい魂に触れながらなお自分のクオリティーライフに執着したことが私には解せない。私の言葉で更に深く言うなら、人間は人間を超えた存在から生を受け、そのことに気付くことによって光を受け、その光によってあたためられ、その光が更に光を広げ、私達はその生を受けた存在へと

再び帰っていきだろうということにどうして千葉さんは心に向けなかったのだろう。もう何もいらないとさえ思える光に魅せられなかったのだろう。その千葉さんが、岩田さんの言われるように、神谷さんに「すばらしい共感」を本当にもち得たということに関しては、私は懐疑的にならざるを得ない。

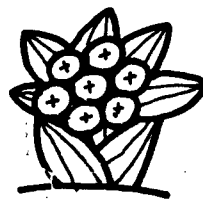
さてフェミニズムの話に戻ると、おそらく10人のフェミニストに10人のフェミニズムがあるのかもしれない。しかしどんなフェミニズムも（男も女も人間として同じ個と主体性をもつ）という共通の因子で因数分解はできるだろう。けれどその後の因子に非常に多くの差異が残るのではないか。例えば、同一労働・同一賃金に対してさえもフェミニストの間でも意見は分かれる。私は神谷さんも千葉さんも同じ因子はもっていたと思う。岩田さんは先号の中で「志をもち、仕事を大切に、しかも生活面をおろそかにせず」生きた千葉さんと神谷さんの共鳴を書いておられる。しかし「志」の方向が非常に違う。そしてこの「志」の違いこそは他の多くのフェミニズム運動の中であって、私達の「フェミニズム、宗教、平和の会」ではっきり意識することが大切だと思う。次号で更にこの違いを深めていきたい。



新入会員紹介

1987. 3月以降

羽 向 貴 久 子	445	西尾市上羽角町郷内 121
足 利 あ や 子	532	大阪市淀川区東三国 6-14-8
岩 本 孝 樹	630	奈良市杏町 112
三狭間 薫	922-03	加賀市庄町
日 野 玲 子	591	堺市新金岡町 3-3-12-308
江 原 由 美 子	231	横浜市中区野毛 3-143-605
田 渕 あ つ 子	612	京都市伏見区桃山筒井伊賀東町 47 コスモ丹波橋 7
坂 田 洋 美	574	大東市灰塚 3-8-23
小 林 幸 子	665	宝塚市伊子志 2-7-3
小 岡 正 照	700	岡山市山科町 16
岸 本 ま ゆ み	663	西宮市甲子園二番町 8-16
松 本 美 恵 子	615	京都市右京区梅津南広町 25-113 コーポ野村四条
天 宅 紘 美	651-13	神戸市北区有野町カラト 33 24-7
藤 谷 不 三 枝	570	守口市橋波東ノ町 4-38
西 本 照 子	536	大阪市城東区今福西 3-5-8
大 浦 小 枝 子	631	奈良市朱雀 1 丁目 10 番地の 6
寺 迫 日 奈 子	790	松山市南江戸 3-1-41 コデラビル 403
東 律 子	564	吹田市出口町 34 番 C 1-1122
上 田 保 美	916	鯖江市日の出町 10-16
黒 川 高		芦屋市
河 野 信 子		福岡市中央区小笹 4 丁目 20-20
小 松 加 代 子	305	筑波郡谷田部町東新井 18-18 高橋学園ハイッ
松 沢 望	069	江別市大麻東町 30-4
滝 田 多 美 子		常滑市栄町 4-10
石 垣 勢 津 子	140	品川区西大井 3-12-3
相 沢 よ し		世田谷区南鳥山 4-12-7
中 村 ミ チ エ	894	名瀬市入舟町 10-1
川 村 紀 子	274	船橋市前原西 2-10-2 サニーマンション 905
中 島 千 恵 子	145	大田区田園調布 3-13-7
⑨ 浜 順 子	168	杉並区宮前 4-26-7
藤 野 尚 子	158	世田谷区玉川台 1-9-23 第一玉川台マンション 604
松 田 ま ゆ み	174	町田市本町田 244-20
松 永 貞 子	223	横浜市港北区新吉田町 3785
アルトマン 由 紀 子	765	善通寺市文京町 3-2-28
松 岡 千 代 子	569	高槻市西冠 2 丁目 7 番 12 号



1987. 12 月末現在

収	入	支	出
前年度繰越し	- 18,000	印刷代	47,000
会 費	74,500	送料・コピー代	29,730
購読料	7,200	関西へ送金	50,000
カンパ	37,000		
冊 子	41,220		
Tシャツ売上金	9,900		
収入合計	151,820	支出合計	126,730

現在高 25,090

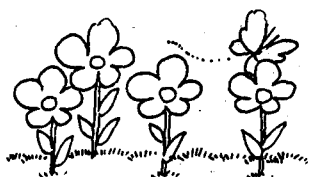
1987. 12 月末現在

収	入	支	出
前年度繰越し	111,645	印刷代	407,400
会 費	126,000	郵送費	32,130
カンパ	40,000	会場費	7,400
冊 子	100,070	文具代	920
シンポジウム	40,700	その他	6,000
関東から	50,000		
収入合計	468,415	支出合計	453,850

現在高 14,565

会費納入のお願い！

’88 年度分の会費 2,000 円を納入して下さいませう
 お願い致します。同封の振替用紙を利用して
 下さい。



編集後記 ◆◆◆◆◆

Womanspirit 5 号をお届けします。今号は関西で担当しました。今、年 2 回関東と関西で編集をしています。いつの日か、他の地域でシンポジウムが開催できたり、Womanspirit の編集ができることを願っています。運動というにはあまりにもおそまつな会ではあるけれど、主体的に関わっていく人たちがより多く増えることを期待したいと思います。

今年のシンポジウムは東京です。シンポジウム
に出席できない人、何か言いたいことを持っている人、
どうぞ投稿して下さい。(J. M.)